

アマゾン族の影の下に

島 高 行

エリザベス・ギヤスケルの小説を論じる時に、男性キャラクターが論じられることは少ない。例えば『クランフォード』の邦訳題名『女だけの町』が示唆するように、主要キャラクターはすべて女性であり、活躍しそうに見えたブラウン大尉もすぐに姿を消してしまう。この町は「アマゾン族」¹に支配されていて、男性キャラクターは影が薄いのだ。

さらにはギヤスケルの小説全体が、この『クランフォード』の特性に集約的に現れていると言ってもいいかもしれない。ギヤスケルの代表作のタイトルには、女性キャラクターの名が掲げられることが多く、彼女たちを中心として物語が展開しているからだ。初期の代表作『メアリ・バートン』もその一例である。しかし、ギヤスケルは男性キャラクターであるジョン・バートンを「私のヒーロー」と呼び、当初『ジョン・バートン』のタイトルを考えていたものの、出版社の意向を受けて現行のタイトルに変更したことが知られている。実際、男性キャラクター、ジョンから女性キャラクター、メアリへと物語の中心は移行している。強力な家父長で労働者のリーダーであった男が、最後には阿片におぼれ幽霊のような姿になり、ついには名前さえ刻まれない墓石の下に眠ることになる。このように女性キャラクターの光の強さに反比例して影が薄くなる男性キャラクターのあり方と、そうはならない可能性を体現する男性キャラクターの姿を『メアリ・バートン』を中心に考えてみたい。その際、女性が経済的独立を果たし、社会に積極的に関わっていくことがもたらす男性側の困惑と不安を、この論文では問題にする。

まず『メアリ・バートン』冒頭の場面、工場で働く女性たちの描写に注目したい。ここで強調されているのは若い女性の外面的美しさ、かわいらしさではなく、

彼女たちの知性と独立心だ。近づいてくる若い男性に目もくれない彼女たちを支えているのは工場で働いているという経済的独立である。続いて登場するジョン・バートンは、女性が工場で働くことを強く批判し、娘のメアリはけっして工場に働きに出さないと断言する。工場で働いていた義理の妹エスタが、その経済力で服を買ったり、夜に外出するようになったあげく家出してしまった事件がその理由とされる。しかし、ここには家父長としての彼の地位を脅かす独立した経済力を持つ女性に対するジョンの恐れと憎しみもひそんでいそうだ。ここで思い起こされるのは、エンゲルスが伝えるマンチェスターにおける女性工場労働者に対する男性労働者の怒りである。職場を女性に奪われた形の男性労働者の怒りは、彼らの男性性を支えてきた経済力をうばわれ、彼らがいわば「去勢された」²存在とされてしまうこと、男性が外で働き女性が家庭をまもるという伝統的な役割分担がくずされることへの不安と怒りなのだとエンゲルスは分析する。女性が家族をやしない、男性が掃除、洗濯、子育てをするという状況が「女から女らしさを奪い、それでいて男に真の女らしさを、女に真の男らしさをあたえることのできない状態」³をうみだしてしまったというわけだ。『メアリ・バートン』のこの場面にも、いきいきとし独立心に富んだ女性に対し、伝統的家庭像を守ろうとする家父長ジョン・バートンの強い反感を同様に読みとることができるだろう。

先に述べたように、この小説の主人公、ヒーローとしてタイトルにその名を掲げられるはずだったジョン・バートンだが、労働者の地位向上を目指す運動に関わる中で、挫折し、殺人を犯してしまう。そして阿片中毒になったあげく、最後にはあれほど嫌悪していたエスタと同じ墓に、その名すら刻まれることなく眠るという皮肉な結末を迎えることになる。ヒーローの地位からすべり落ちてしまった彼に反比例する形で、積極的に行動するようになるのが娘のメアリ・バートンである。愛する人の無実を証明するため、単身リヴァプールまで赴き、証言者を捜索し、さらに裁判という公開の場に身をさらして堂々と弁明を行う彼女は、明らかにこの小説の中心人物となっている。あくまで家庭の中で、自分の支配下に娘を置いておきたいというジョン・バートンの思いにも関わらず、メアリは好むと好まざるとに関わらず、家庭の外に出て行動し、愛する人の命を救うという英雄的な行動力を見せる。裁判所でのメアリの姿が、父親殺しの罪で裁かれたベアトリーチェ・ツェンツィの肖像を思わせたという描写からは、本来の主人公であ

るジョンをいわば殺害して、その地位をうばいとった女性キャラクターとしてのメアリのあり方が示唆されているのかもしれない。

つぎに女性が家庭という私的な領域を出て、公の場面で活躍し、社会的に重要な役割を果たす例として、この小説の背景になっているチャーティスト運動における女性の働きを見てみたい。1838年に発表された「人民憲章」の実現を目指すチャーティスト運動は、特にその初期のデモには多くの女性が参加し、行動もかなり過激だったことが知られている。同時代のある牧師は、彼女たちが「女性らしい礼儀正しさ、謙虚さ、内気さ」⁴を拒否しており、家庭を守るという義務を放棄し、社会にとって危険な存在であるとして非難している。ここでも女性が公の場にその姿を現し、堂々と意見を述べることへの男性の不安と恐怖を見ることが出来るだろう。

ところで、同じような批判が18世紀半ばのジャコバイト運動においても見ることが出来るので紹介したい。ジャコバイトとは、名誉革命で亡命したジェームス2世に忠誠をちかう人々のことで、革命以後の政治体制を転覆し、ステュアート家の復権を目指していた。断続的に反乱、蜂起を繰り返していたが、その最大のもものは1745年に起きている。この時、ボニー・プリンスことチャールズ・ステュアートひきいる反乱軍がスコットランドから侵攻し、イングランド中部まで迫った。しかし補給が続かず、態勢をたてなおした強力なイングランド軍の前に結局、敗退してしまう。これ以降、ジャコバイト運動そのものの勢いも失速することになるのだが、それ以前、つまり18世紀前半の英国にあってジャコバイトは現実的な脅威であった。こうした状況下、実際の戦闘の他にも、名誉革命以後のハノーヴァ朝体制を支える側のウィッグとそれに反対するジャコバイトとは、それぞれのプロパガンダ活動を行い、版画、雑誌、パンフレットなど様々な出版物を用いた宣伝合戦が繰り返されていた。その際、男性女性のあるべき役割という問題が、この政治闘争において大きな争点として利用されたことが注目される。

ハノーヴァ朝を支持する反ジャコバイト派は、『トム・ジョーンズ』などの著作で知られるヘンリー・フィールディングによる『ジャコバイト・ジャーナル』、あるいは匿名筆者による『女性の反乱』といった定期刊行物、あるいはパンフレットによってその主張を展開した。その特徴は、『女性の反乱』というタイトル

からも明らかなように、ジャコバイトが引き起こした政治的混乱、闘争が、そのまま男性と女性の性差をめぐる混乱、闘争としてとらえられているということだ。1747年に出版された『ジャコバイト・ジャーナル』にはカトリックの僧侶に扇動されたロバに乗ったジャコバイトの男女の姿が描かれているが、ここでは女性が抜き身の剣を持ち、大声を張り上げている点が読者の注意をひく。『女性の反乱』でも男装したスコットランドの女性が集団を率いてジャコバイトの反乱に加わった物語が語られている。

「英国の英雄とイタリアの亡命者の対照的な姿」と題する版画⁵では、カロデンの戦いでジャコバイト軍をうち破った英雄カンバーランド公爵が堂々としたいわゆる男性的な軍人姿で立っているのに対し、破れたチャールズは亡命先のイタリアで弱々しく座っている。戦いに敗れたチャールズが逃走する際、女装して追求の手を逃れたというエピソードも効果的に利用され、ハンサムな若者として有名だったチャールズのカリスマ性を、このように女性化することで消し去ろうとする意図がうかがえる。

こうした図版から見てくるのは、ジャコバイト運動がいわゆる男勝りの女性による男性支配に対する反乱であり、伝統的な男女間の関係の危機、ひいては社会全体の秩序の危機だという反ジャコバイト側の主張だ。ステュワート家の正当な後継者であるというジャコバイトの主張に対する、これが反ジャコバイトの強力な武器となった。そして運動の先頭に立ち活躍する女性たちを制御することの出来ないジャコバイトの男性（夫、父）の弱さが問題にされ、時に笑いものにされる。フィールディングの小説『トム・ジョーンズ』にも1745年のジャコバイト反乱は登場するが、反乱を鎮圧する政府軍に参加することを考える主人公トムが勇気に溢れた男性として描かれるのに、隠れジャコバイト、パートリッジは幽霊や魔女の存在を信じる、とても迷信深くて臆病な男性として描かれている。この対照的な男性キャラクターの姿が、「男らしい」反ジャコバイトと「女々しい」ジャコバイトという図式にあてはまるのは明らかだろう。

ここで問題なのはこうした反ジャコバイトの文書に見られる女性のあるべき姿が慎み深さ、内気さ、家庭的であるとされていることで（『トム・ジョーンズ』ではソファイアがそうした「美点」を賛美されている）、それらを逸脱するジャコバイトの女性はすなわち女戦士アマゾン族の末裔であり、彼女たちは「自然な」

女性のあり方に反する怪物と見なされていることだ⁶。

チャーティスト運動に参加した女性への非難と18世紀のこの図式の共通点は驚くべきものがある。もちろん階級闘争の色の濃いチャーティスト運動にたいし、ジャコバイトの戦いは何よりも王朝の正統性をめぐる政治闘争であり、そこにイングランド対スコットランドという地域対立、プロテスタント対カトリックという宗教対立の要素がからみ、簡単に比較は出来ない。しかし女性が公の場にたち、積極的に活躍することへの男性側の批判には、同じ不安と恐怖がひそんでいるようだ。

こうして女性が社会に進出し活躍すると、つまり伝統的価値観の立場からすれば「男性化」として、活躍の場をうばわれた男性が「女性化」としてという図式ができあがる。女性が工場で働くことに反対した家父長ジョン・バートンが運動に挫折し、なんら積極的な活動を行えなくなるのに対し、従順な娘から愛する人の命を救うまでに活躍するメアリという『メアリ・バートン』の流れにもこの図式は符合する。しかし男性と女性が対立し、一方が他方を否定することによってしか活躍できない不毛な対立の図式、つまりアマゾン族のような女性と幽霊の様な男性という図式でしか世界はありえないことをこの小説は提示するだけなのだろうか。

ここで取り上げたいのは『クランフォード』に登場する男性キャラクター、ピーターである。ヒーローと言うよりピカロといった方がいいかもしれない彼も、『クランフォード』の中では、ブラウン大尉におとらず、アクティブに活動する例外的男性キャラクターだ。そして彼もまたそのいたずらがたたって、ブラウン大尉同様、作品世界から追放されてしまう。しかしピーターが特異な点は、彼が再びクランフォードの町に帰ってきて、重要な役割、肯定的な仕事をこのアマゾン族によって支配された場で成し遂げていることだ。

このピーターの特性を考えると、彼が追放されることになった女装の問題に注目したい。牧師である父親に女装して近づき、まんまとだましたピーターは、ピカロの面目躍如で、父親という家父長の権威をこげにして笑っている。しかし姉に変装して、赤ん坊を抱きかかえるまねをすること、つまり母親を演じること

が父親の逆鱗に触れて処罰されることになる。ピーターがこのいたずらを行ったのが、外からのぞき見ることが出来る家の庭の小径という、内と外との微妙な中間領域であったように、ピーターは男性女性という領域を衣装と演技によってその境界線を曖昧なものにしたのだ。このことを権威者である父はけっして許さないだろう。一度は追放されたピーターが再び戻って肯定的な役割を果たす背景を考えるには、女装するピーター、母親を演じるピーターという、うちなる女性性を抑圧せず、むしろ演技によって表面化させる男性キャラクターのありようがヒントになりそうだ。

そうした視点で『メアリ・バートン』を読んでみると、ジョン・バートンが実質的に姿を消す物語後半、メア리를支える男性キャラクター、ジョブ・リーとジェム・ウィルソンの二人が、ともに内なる女性性を隠さない存在であり、ある種の母親的役割を果たしていることが注目される。

ロンドンでの挫折を語ろうとしないジョンにかわって、自らのロンドン体験を語り出すジョブは、まだ乳飲み子の孫娘をつれてロンドンからマンチェスターに戻ってくるまでの苦労の道のりを語る。泣きやまない赤ん坊をあやすため、ジョブとジェニングズの二人の老人は、見よう見まねで母親役を演じようとする。女中のナイトキャップを借りて、女装して母親を演じるのはジェニングズの姿は、読者に泣き笑いをもよおさせる見事な場面だが、最終的に孫娘を引き取って育てたのはジョブ・リーの方だ。ジョブは見事に母親役を演じきったのだ。この話が終わったとき、メア리가「子どものように」⁷すやすやと眠っていたという記述からは、苦難に立ち向かうメア리를やがて彼が母親のように支えるであろうことを示唆しているようだ。

さらにジェム・ウィルソンは、危機にある女性を救い出す伝統的なヒーローではなく、逆にメアリによって命を救われる男性である。意識を失ったメアリの姿を見て、涙を隠さない彼は、いわゆる「女々しい」男性であるかも知れないが、病に倒れたメア리를ジェムは母親のように看護する。看病という忍耐力を要する仕事をジェムはやり遂げるのだ。かつて母親を若くして失い、今は父親も殺人者としてこの世から姿を消そうとしているメアリの肉体的、精神的危機を救ったのは、この貧しくまるでヒーローらしくない男性キャラクターだったのだ。

このようにメア리를支えるジョブとジェムの二人の男性は、どこか女性的な特

質、あるいは母親的な特性を共有している。また、ジョン・バートンも貧しい子どもに食べ物を与えたり、迷子を送り届けたりといった優しい面が描かれていることも忘れるわけには行かない。しかし彼の中の女性的な面が、社会の矛盾に直面し、労働運動の過激化とともに抑圧され、居場所を失い、ついには殺人にまで至ってしまうのが彼の悲劇といえるだろう。

父親ジョン・バートンに代わって主役の座に着いた格好のメアリではあるが、経済的独立を達成し、社会運動の先頭に立つようなことはない。ジェムの命を救うためにリヴァプールの町をかけずり回っているさなかも、自分の意志ではなく他人の意志のままに行動することはどれほど楽なことかと感慨にふけったりもしている。最終的にはジェムと結婚し、カナダに移住して、家庭の主婦となることを選択するメアリは、この小説冒頭に登場した独立心と知性に富んだ女性工場労働者の姿とは大きく異なっている。この点で小説『メアリ・バートン』の結末は、中途半端なものとして非難されることがある。しかし、女性が外で働くことに強く反対していた最も保守的な意見を持つ女性であるジェムの母親にジェムのような人間に罪を着せようとしたイギリスという国が信用できなくなったと語らせ、息子たちとともにカナダに移住させるという結末はイギリス社会に対する痛烈な批判であろう。ジェブもまたイギリスを棄ててカナダに移住するという最後の場面は、ジェムやジェブの様な内なる女性性を否定しない男性が生きにくいイギリス社会への批判でもあるだろう。それは、チャーティスト運動が組織化されるにつれ、女性が排除され、当初はあった男性と女性が対等に運動に参加する機運が失われていったこと⁸無縁ではないはずだ。

本稿は2006年10月1日に中央大学で開催された日本ギヤスケル協会第18回大会シンポジウム「ギヤスケル文学と男性キャラクターのあり方」における口頭発表に基づいている。当日いただいたご質問、ご感想から多くの示唆と励ましを得たことに深く感謝します。

註

1. Elizabeth Gaskell, "Cranford" in *Cranford / Cousin Phillis* (Harmondsworth:

Penguin, 1984) 39.

2. フリードリヒ・エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』（岩波書店、1990年）277頁。
3. 同上。
4. ドロシー・トムプソン『階級・ジェンダー・ネイション』（ミネルヴァ書房、2001年）138頁。
5. Jill Campbell, *Natural Masques; Gender and Ideology in Fielding's Plays and Novels* (Stanford: Stanford UP, 1995) を参照。
6. Campbell 142.
7. Elizabeth Gaskell, *Mary Barton* (Oxford: Oxford UP, 1987) 127.
8. トンプソンは、前掲書で「重要な決定はすべて家父長である父がぐだし、下位の成員がうやうやしくそれをうけいれるという、ヴィクトリア時代風の家庭と家族像は広く浸透し、すべての階級に影響した。チャーティスト運動の時期に得た収穫である自覚と自信の深まりと、男女がともに対等に協同して行う政治運動への動きは、この世紀半ばの直前の時期に消え失せた」（153頁）と指摘している。

(実践女子大学准教授)